

ルネ・ラリックの宝飾作品に見る 19 世紀末女性幻想

—装身具から装飾芸術へ—

樋田 麻純 (國學院大學)

19 世紀末から 20 世紀にかけて活躍したルネ＝ジュール・ラリック (René Jules Lalique, 1860-1945) は、アール・ヌーヴォーおよびアール・デコを代表する宝飾工芸家・ガラス工芸家である。彼は、作家活動の前半期 (1890-1912) において、当時主流であったガーランド様式とは全く異なる多彩な女性像を用いた数々の斬新な宝飾作品を生み出していった。

しかし当時、たとえば宝飾作家 A. フーケの場合のように、女性像を取り入れた装身具はセンセーショナルであり、ラリックの特に女性裸体像を取り入れた宝飾作品は、当初は非難的となった。現実の女性の身体を女性像で飾ることが美の規範にそぐわないと考えられたからである。こうした挑発的な宝飾作品を身に付けた女性が果たしてどれだけのいたのかという疑問が残る。今日様々なモチーフを採用した装身具を見慣れた我々にとっては、ラリックの作品を大勢の女性が身に付けたと考えがちであるが、これは危険である。さらに、ラリックの宝飾作品の大部分は女性の使用を想定されて作られているが、カルースト・サルキス・グルベンキアン (Calouste Sarkis Gulbenkian) (1869-1955) が蒐集したコレクション (現グルベンキアン美術館所蔵) のように男性にとっての蒐集と鑑賞の対象であったことも考慮しなければならない。

先行研究では、ラリック作品が当時の女性たちに容易に受け入れられるものではなかった理由として、ガーランド様式では使用されなかった獣骨などの素材の導入や高額な価格といった複数の要因が挙げられているが、本発表ではさらに、19 世紀末に絵画や文芸において流行していた、男性の女性に対する幻想を表現したモチーフに起因していたことを、自然の象徴としてのニンフや重力を無視したように風に漂う女性、レズビアニズムや踊る女性などのモチーフの図像学的解釈、および顧客との書簡や評論などの文書資料から論証する。

ラリック作品は、宝飾品という美しさのみならず実用性が重んじられるジャンルにおいてきわめて特殊な位置にある。それはいわば純粹芸術のごとく自己完結性を有する宝飾作品であり、絵画や文学と同じくまさに女性幻想を反映している。そしてその独自性が災いし、一般の女性には手に余る代物だと見なされていた。高い芸術性を有していたが故に、一般の女性から倦厭され、むしろ着用者を選ぶ作品となったと言えよう。

女性を飾るための装身具という制作者ラリックの意図に反して、オブジェとしての宝飾となったその作品は、ラリックを含めた当時の男性が抱いた女性観を反映し、同時に幻想を満たす役割を担っていたと見なしうる。支持体を凌駕し、装飾という機能を超えるに至った彼の宝飾作品は、近代における装飾芸術の枠組みの中で論じられるべきではないか。